

ふくしまからのアピール

## 福島県有機農業ネットワーク副理事長 杉内清繁

2011年3月11日14時46分、千年に一度とも云われるマグニチュード9.0の巨大地震（東日本大震災）が発生、最大震度7～6の激しい揺れは長時間続きました。海に囲まれた日本では、地震に伴う津波の発生も大きな被害をもたらす自然の脅威です。地震発生後15分～1時間位にかけて何回となく押し寄せる巨大波が陸地に向かって襲ってきました。死者・行方不明者は19,000人におよび、その被害は東北3県（福島 宮城 岩手）が大半を占めました。

私の住む東北福島県浜通り地方は日本でも有数の発電基地として位置付けられています。中でも原子力発電所が集中して10基設置されているところでもあり、今回のような巨大地震と巨大津波により1号機、2号機、3号機、4号機と連続して爆発を伴った大惨事は、広範囲の自然環境破壊、住民の健康不安、地域社会崩壊、全ての面において負の遺産を背負ってしまった。私もこれまで住み慣れた自然豊かな境地を追われ、これまでも経験したこともない被難生活を余儀なくされ、さらには家族、地域全体までもバラバラに引き裂かれた不安、恐怖の日々が続きました。

そして、爆発が発生した東京電力福島第1原子力発電所から20キロ圏内の地震、津波で被災された家族の方々は、死者・行方不明者の身を案じながら1年余り立ち入ることの出来ない生活を送る毎日となったのです。そのおかれた身を思うと、今も胸が痛い想いです。

放射能の汚染さえなければもっと打つ手があったのに、何も出来ない悔しさ、むなしさ、怒りはこの地に住む多くの人たちが強く感じ、今もその悲惨な生活は続いたままです。

事故の起きた原子力発電所からの放射能汚染は、気象条件・地理的条件等によって極高汚染地から低汚染地まで複雑に入り乱れる汚染状況が確認されました。広範囲に及ぶこの様な状況の中で私達はこれから先どの様に生きていけばよいのか非情な重圧がのしかかった状況です。

これまで日常的に云われてきた原子力の平和利用、原子力発電の安全神話は、計り知れない自然界の脅威のまえには、ことごとく打ち碎かれる結果となってしまいました。暮らしのなかで電気エネルギーの確保は私達に密接に結びつくものとして考えなくてはなりません。しかし現状から見えるものは あまりにも危険要素を多く含む経済開発主導先行社会のあり方には疑問となる点が多々あると強く思います。

私は自然環境の生きづく大地と向き合う農業者ですが、毎日の暮らしの中で、自然環境から離反した取り組みの中には必ず負の代償があるように気づかされることがあります。

今、私達が生きようとする大地は放射能汚染とどのような向き合い方が考えられるのか難題を抱えた状況におかれています。チェルノブイリ原発事故に携わった経験のある科学者の方から多くの貴重な対処法のお話も頂きました。そして今グリーンオイルプロジェクト名として行動を開始しました、いつか又自然環境の中でともに共生できる、そして生きる実感の持てる社会を求めながらすこしずつ進んで行きたいと思っています。